

---

# 裏亞種

羽月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏亜種

### 【Nコード】

N4429S

### 【作者名】

羽月

### 【あらすじ】

本編小説『死神亜種』の裏話や番外編。主に主人公以外の視点です。

ネタバレもあるのでお気を付け下さい。

タイトル前に『』が付いている話が最終更新です。

珍妙で不思議な死神（上）

本編18話目読解後推奨（前書き）

ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の18話目読解後を推奨します。

保健室でヒイラギと初対面を果たしたときのキリユウ視点の話です。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

誰もいない廊下に一人の足音だけがコツコツと響く。

黒髪と赤目を携えた超絶美形の男――キリュウは不意に足を止めた。目的地に着いたのだ。

目の前には『保健室』のプレートがぶら下がっている。

「キリュウ」

後ろから名前を呼ばれ振り向くと、そこには予想通り腕を組んで立っている担任の姿があった。先程魔力を使う気配を感じた。空間魔法で転移してきたのだろう。

俺は黙ったままその男を見ていたが、そいつは特に気にしない様子で言葉を続ける。

「ここは講堂じゃねえぞ」

「……寝る。面倒だ」

そう応えると担任はチツと舌打ちをしてガリガリと頭を掻いた。俺が何をしようがいつも見逃すくせに今日はそうもいかないらしい。

「お前が来ねえと勝率下がるじゃねえか」

……そういやさつき講堂前で死学の女教師と何か喋っていたな。

コイツにしては珍しく機嫌が良さそうだったのはその女教師と賭けをしていたからか。

黙ったままの俺に向かってこの男は更に言葉を続ける。

「悪魔の魅惑に抵抗できる死学の2年生が一人でもいるかどうか。因みに俺はいないに賭けた」

「……」

馬鹿らしいと無視を決め込み俺は魔力を練って、目の前にある死学の保健室と黒学の保健室の空間を繋げた。

今日はペア発表だか何だかで死学に来ている。俺はパートナーなどどうでも良い。実習でペアを組もうが相手に合わせるつもりはない……誰でも一緒だ。俺は好きにさせてもらう。

ガラリと音を立てて扉を開けるとそこは死学ではなく黒学の保健室が広がっていた。別に死学の保健室でも良いのだが邪魔が入ると不快なので態々（わざわざ）空間魔法を使って繋げたのである。面倒だったが普通に入れば死学の保健室に辿りつく様に小細工をし、罾もいくつか仕掛けた。これで空間魔法を使えない死神は勿論、悪魔も容易には此処に入れないだろう。

俺はそこへ足を踏み込んだ。

「こりやまたえらく嚴重にしたな。それ、引つかかったら死ぬんじやねっ」

恐らく仕掛けた罾の事を言っているのだろう。軽い調子で担任が言う。

俺が仕掛けた罾は5つ。それは進むほど強力なものになっている。4つは警告用の軽い罾だが最後のものは殺すつもりで仕掛けた。……まあそこまで進める奴は後ろに立っている男くらいしかないの。最後はそいつ用なのだが。

「……寝る」

「あーはいはい。まあお前が居なくても勝ちも決定だしな」

扉を閉める前、にやりと笑う担任の顔が目に入った。何を賭けたのかまでは分からないがアイツにとっては余程良いことらしい。

まあどうでもいいが。

俺はベッドに入って目を閉じた――

――誰かが此処に来る。

結界に触れる振動を感じ、俺は目を覚ました。そして微かに眉間に皺を寄せる。

……何かがおかしい。

確かそいつはこちらに向かつてはいるのだが罨が発動していないのだ。罨が発動しない為には空間魔法を使い、俺が通った道筋を寸分の狂いもなく辿らなければいけない。そんな所業はあの担任だつて出来ないというのに。

……一体誰だ？

俺が横になつたまま頭だけ扉の方へ向けた時、ガラガラとゆつくりそれが開く音が聞こえた。ベッド周りのカーテンが引いてあるの、まだその姿を見ることはできない。

ガタゴトと物音を立てながら少しずつこちらへ進んでくる侵入者……何をしているのだろうか。

眉を顰めたとき、侵入者の手がカーテンに掛かった。そしてそつと引かれる。

………女？

そこにはえらく顔色の悪い女が立っていた。死学の制服を着ている……制服の色から同学年だと分かった。……でも何故空間魔法が

使えない善の死神が此処に？

「……………ベッド」

その女はボソリとそう呟いて転がるように俺が居るベッドへ入ってきた。……………どうやら俺が居るということを気付いていないらしい。先程もこちらを見てはいたがその虚ろな目にはベッドしか映っていないようだった。

危害を加えるわけでもなさそうなので俺はそのままその女を観察することにした。

女は一つ長い溜息を吐いた後、何やらごそごそし出した。顔色は相変わらず悪いままだが何故か幸せそうな表情を浮かべている。

「……………んふふ」

「……………」

奇妙な声を発したと思えば、頭を枕へぐりぐり押し付け、足を小さくぱたぱたとばたつかせ、そして布団を愛しそうに撫でている……………

…何がしたいんだこの女。

俺がその奇行を眺めているとゴロリとこちらへ寝返りをうち、身体同士がぶつかった。……………これは流石に気が付くだろう。

そう思っていたのだがその女の目は閉じたまま何故か俺に抱き付いてきた。そして手をごそごそと動かし身体に触ってくる……………

……………痴女だろうか。

しかし先程までの幸せそうな表情は消え去り、今度は眉間に皺を寄せ、たいそう不服そうな表情をしている。

この女は本当に何がしたいのだろうか。

じつと顔を見ているとそっと女の目が開いた。

明るい茶色をした二つの目と俺のそれがかち合う。

「……………人型の抱き枕とか……………ないわー……………」

意味が分からん。

この理解不能な女の行動と言動に俺は眉を顰めた。

そんな俺を女は相変わらずの不服顔で幾許いくばくが見つめる。そういえば初対面の女でこんな態度をとられるのは初めてだどこか頭の隅で考えた。

「……………悪魔だし」

怪訝な表情で溜息を吐き出し、心底嫌そうな声音で言葉を零す女。悪魔と何かあったのだろうか。しかし俺はこの女に何もしていない……………寧ろ現在進行形でセクハラまが紛いな事をされている。

さてどうするかと考えていたら急に女の様子が変わった。今まで怪訝だった表情が不思議そうな表情になりこちらをじっと見てくる……………と思えば今度は自分の腕に目を遣り徐々に目が見開いていった……………随分と忙しい顔だ。

「……………すみません、ごめんなさい、お邪魔しました」

どうやらやっと状況が把握できたようだ。女はそう告げ腕を放し、もそもそとベッドを降りていくのを見送る。

床に足を付いて立ち上がった瞬間、呻きながらぐらりと身体が傾いていき、女の姿が俺の視界から消えた。

そして床にどさりと倒れる音と共に「ぶっ」という間抜けな声が聞こえた……………どうやら顔面を打つたらしい。

直ぐ起き上がると思われたその女は中々起き上がらない。俺は身体を起こし、ベッド横の床を覗いてみるとその女がうつ伏せで倒れていた。女は心底悔しそうな顔で呟く。



「……………ううー、くそう……………鱗翅類め……………」

……………鱗翅類？

思いもよらなかつた単語に俺は思わず首を傾げた。

……………コイツは蝶々と戦つたたでもいつのか？

そしてこの有様になつたというのか？

しかしそんな凶暴な蝶々がいると聞いたことがない。ひらひらと宙を舞っているだけだ。

……………やはり意味が分からない。

「……………おい」

俺はついに女に声を掛けた。だが一向に返事は帰ってこない。

ベッドから降り、近寄るとすやすやと寝息が聞こえてきた……………どうやら寝ているようだ。

俺は何をするでもなく再びベッドへと戻る。放置したまま寝ようとしたのだ。

寝転んだとき視界の端にうつぶせ状態のままの女が映る。

目を閉じてても何故か気になり一向に眠気が訪れることはなかった。

「……………」

……………邪魔だ。

俺は起き上がり再びベッドを降りた。

そしてその安眠妨害をする女を抱え、今まで使っていたベッドへと下ろし、自分はベッドサイドにあった椅子に腰掛け、寝ている女へと視線を遣る。

……………一体何者だろうか。

冷たく固い床から再び暖かく柔らかなベッドへ戻ったからか、女は顔色は悪いままだが幸せそうな顔ですやすやと寝ている。

その様子を暫し眺めた後、俺は棚から一冊の本を取り出しページを開いた。

珍妙で不思議な死神（上） 本編18話目読解後推奨（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです。  
（ ）

珍妙で不思議な死神（中）

本編18話目読解後推奨（前書き）

ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の18話目読解後を推奨します。

珍妙で不思議な死神（上）の続きです。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

どれくらい時間が経っただろうか。

俺は読み終えた本を閉じて棚に仕舞い、時計を見た。

12時40分……結構な時間が経っていたらしい。

そういえば、とベッドに横たわっている女を見る。目を覚ましたら何者なのか問い質そうと思っていたのだが……あれから目を覚ましていない。

相変わらず締まりの無い顔で寝入っている女。顔色は悪いままだ。無理やり起こしても良いのだが……涎を垂らしながら心底気持ち良さそうに寝ている様を見ていたらそんな気も失せてしまった。

まあ、授業をサボった所でこれといって特に大きな支障はない。

「……………」

暫し眺めていると女が何か言葉を零した。

起きたのだろうかと思っただが、ゆっくりとした規則正しい息遣いと閉じられたままの瞳を見てそうではない事が分かった。……………どうやら寝言のようだ。

声が小さ過ぎて言葉は拾えなかったが表情を見ると先程と変わらず緩み切っている。幸せな夢を見ているらしい。

「……………めん……………」

……………めん？

またもや発された寝言。今度のものは先程よりもしっかりと聞き取れた。

何となく耳を近づける。

「……………いと……………らーめん……………きた……………」

……………。

……………いと？……………糸ラーメン？

……………ラーメンは聞いたことがある。確か、茹で上げた麺に醤油だか味噌だか塩だかで味付けされた熱い鶏がらスープを並々とかけ、仕上げに葱などの具を盛り付けた食べ物だ。

しかし、糸ラーメン……………そんなもの聞いたことが無い。麺が糸のように細いのだろうか？……………謎だ。

更に耳を傾ける。もしかしたら欲しい情報の糸口をポロッと喋ってくれるかもしれない。

「……………私の……………やらんぞ……………」

……………この女は食い意地が張っているらしいというどうでも良い情報を手に入れる事が出来た。

女を見ると少ししかめっ面だ。何とんでも夢の中の相手に取られたくないようだ……………糸ラーメンとは余程美味いものらしい。

……………これ以上聞いていても欲しい情報は手に入れられそうになさそうだ。

「…………………………」

馬鹿らしいと俺は屈んでいた体制を直したその時、女の瞼がピクリと動いた。

どうやら今度は本当に起きたらしい。俺は女をジッと見る。

「……………」

「……………」

……………どうしてか女は瞼を上げようとしな。確実に起きているはずなのに……………何故だろうか。

痺れを切らした俺が声を掛けようと思ったその時、やっと女がゆるゆるとゆっくり瞼を上げる。

そして俺の姿を認めた瞬間——即、それは下ろされた。

……………何故閉じる。

「……………起きたか」

堪らず声を掛けたが反応が無い。

少し待つと観念したように閉じられた瞼がもう一度ゆっくりと上がる。

何かを期待したようなその瞳は俺と目が合うやいなや落胆の色に翳<sup>かげ</sup>った。

……………一体何だ。

「……………おはようございます」

「もう昼だがな」

「……………こんにちは」

「……………」

まだ朝だと思っっているようなので訂正を入れたら挨拶を昼のものに変えて言い直してきた……………やはり変な女だ。

女はそう言ったきり何か思索し始めたと思えばこちらを見上げてくる……………その間もところどころと変わるその表情を眺めていた。

明るい茶髪とそれと同色の瞳……………死神では有り触れた配色だ。髪と瞳はその者の一番得意な属性の色が表れ、そしてそれは魔力が強ければ強いほど比例して濃く表れてくる。まあそういう者は大体が

優れた一族の者なのだが。……目の前の女を見る限りきつと大した魔力もないのだろう。

ならば何故、此処に来る事が出来た？

……謎は深まるばかりだ。

「あの、もしかして運んでくれました？」

思案していると女が話し掛けてきた。確かに間違っではないの  
で「ああ」と答えると女がきよんとした……何だ？

邪魔だったからと付け加えるとまた考え出したようだ……そして  
目を逸らして何故か落ち込んでいる。意味が分からない。

「……ご迷惑をお掛けしました」

謝罪してきたのでまた適当に返事をする。

……だが謝罪などはどうでも良い。

お前は一体何者だ？

見下ろしていると女がこちらを見上げてきたので目が合った。  
今度は逸らしてこないその瞳の中を覗くようにじっと見る。

「……お前は何故此処にいる」

一体どうやって入ってきた？

言外にそう問い質す。まさか意味が分からないはずはあるまい。  
あれだけ嚴重なトラップを掻い潜って来たのだから。

俺の言葉を聞いた女はまたきよんとした後、さも当たり前とい  
ったように言葉を返してきた。

「体調悪いからですが」



……。

……まさか本気で言っているのだろうか？

女は答えたぞとばかりに俺から視線を外し、何故か今度は愛おしそうに布団を見ている。

……………布団マニアか？

「……………いや、そういう意味では……………まあいい」

女が不思議そうに首を傾げたところで溜息を吐き出しつつ説明を止めた。

とても嘘をついているようには見えなかったのだ。……………信じられないがどうやら本気らしい。

尚も首を傾げ続ける目の前の女を見て、俺の中で不思議な女と位置付けをした。

珍妙で不思議な死神（中）

本編18話目読解後推奨（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難しいです  
)

珍妙で不思議な死神（下）

本編18話目読解後推奨（前書き）

ネタバレがございましてので本編小説『死神亜種』の18話目読解後を推奨します。

珍妙で不思議な死神（中）の続きです。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

体調が悪いからだと言えた女。

……まあ確かに此処は保健室だ………死学ではなく黒学の保健室だが。

今まで普通に話していたので何とも思わなかった、女の顔色は悪い。確かにかなり体調が悪そうだった。

………そういえば倒れる前に鱗翅類がどうか言っていた。

まさか蝶々のせいでこのような事態になったとは思えないが……。

……。

………無性に気になる。

「恐ろしく顔色が悪いな。………風邪か何かか」

蝶々にやられたのか？とは流石に聞けず、少し考えてから風邪かと問う事にした。これなら普通の会話になっているはずだ。

………何かという部分に蝶々が入らないかと少しの期待を込める。

俺が問いかけると女は「へ？」と間抜けな返事を返してきた。

それと同時にこちらに目を遣り、ぱちぱちと瞬きを繰り返している。

………まさか本当に？

「………あー風邪じゃないですよ。講堂で今日ペア発表があったんですけど………その空気に酔って気持ち悪くなったというか………多分悪魔が撒き散らしていたフェロモン酔いです。私には強烈過ぎるみたいですね」

あれ何とかならないかなと忌々しそうにぼやく女。

鱗翅類……………鱗粉は魅惑の力のことが。なるほど、理解した。

気になっていた蝶々の正体は悪魔だとは分かったが……………この女、本当に何者だ。

魅惑が効かない……………しかもあの数の悪魔相手に、だ。

しかしそれに関しては少数ならいるだろう。いないとは言いきれない……………が体調を害するというのは聞いたことがない。

それに悪魔の魅惑に対抗するには強固な意志、又は強い魔力を要する。

俺の目に映っている髪と瞳は有り触れた色、女から感じる魔力も高いとはとても言えない。……………意志が強いのか？そうは見えないが……………本当に何処までも異様な奴だ。

……………まあ此処へ来る事が出来た時点で普通ではないのだが。

「そついえば悪魔あなたが近くにいても全然気持ち悪くなくてないのが不思議です」

考え込んでいると不思議そうにそう女が言った。

言われてみれば……………確かにそうだ。他が異様過ぎて気が付かなかった。

俺は現在魅惑の力は使っていない……………というより使うわけにはいかない。

俺のそれは強すぎる。それを喰らった相手は惹き付けられる所か下僕と化してしまうのだ。

まあ使っていない通常状態でも、そこらの悪魔が魅惑の力を使つたような状態だから使う必要もないのだが……………。

……………そついえば、悪魔以外で普通に話せるのはコイツが初めてだ。改めて気が付いたその事を新鮮に感じながら、今俺がそれを使っていないことを話すと女はピシリと固まった。

……まさかこんな常識も知らなかったのか？

「……押さえられるんですか？」

「寧ろ出そうと思わなければ出ることはない」

投げかけられた質問に事実を告げれば驚きながらも凄まじい殺気を発しながら勢い良く上半身を起こした………と思えば、苦しもうに呻いてまたベッドへと帰っていった。

自分の状態を一瞬忘れたのか……間抜けだ。

「………気持ち悪………っ」

目を硬く閉じてうーうー唸っている女を見下ろす。どうやら眩暈を起こしているようだ。

これがただの眩暈ならばどうしようもないが、原因が悪魔の使う魅惑なら何とかなるだろう。………ただ残っている毒気を取り除いてやれば良い。

女の額に手を当てると、女は目を開けて額の上に置かれたものに視線を遣ってから今度はそれをこちらに向けた。

その瞳を見ながら言う。

「………楽にしてやる」

そう告げて毒気を抜こうとした時、一瞬女の目に好戦的な色が浮かび、右足が僅かに動く気配がした。何故か蹴り上げるつもりらしい。

ギリギリで避けるつもりだった俺はそのままだったのだが、俺に向かって繰り出されかけたその蹴りは俺に届くことは無かった。…

………避けたのではない。途中で止まったのだ。

見下ろしていた女の顔が徐々に驚きのもに変わり、目をそろそ

ると逸らし始める。

その顔にはありありと「しまった」と書いてあった。

……。  
……。「楽といってもそういう意味合いではない。」

バツが悪そうに礼を告げてくるので、こちらも毒気を抜いただけと告げる。

決して殺そうと思ったわけではない。

再度告げられる礼に「ああ」と返事をしながら先程そろそろと定位置に戻されていた右足を思わずチラリと見ると、女の顔が引き攣った。

……バレバレだというのに隠せるつもりでいたらしい。

分かりやすいくらい表情がころころと変わるのに、何を考えているのか今一分からない……不思議だが面白い女だ。

そう思っているとははと引き攣った笑いをしていた女は何故かマジマジと俺を凝視してきた。

……本当に飽きない。

ふと時計を見ると13時を指す所だった。

そういえばアイツに呼ばれていた時間が13時……面倒臭いが流石にこの呼び出しを無視するわけにはいかない。

俺は「そろそろ行く」と女に告げ、立ち上がって出口に向かった。

……ベッドから出口までの短い距離で色々なものが倒れたりズレたりしている。

これはもしかしなくてもあの女が入って来た時の惨事か。

……。  
……。「惨事といえば。」

俺は肩越しに女を振り返った。

「……口元を拭いておけ」

今更ながらに注意をすると女は未だに付着していた涎を手の甲で

平然と拭った……恥じらいはないらしい。

その妙に漢らしい仕草を見届けてから俺は空間魔法を解除し、目の前の扉を開けて保健室を出た。

勿論、足を踏み入れた先は黒学の保健室前の廊下だ。

「……………」

このままだとあの女も此処から出てくる事になる。

もう一度繋げようと魔法を発動させようとしたが――止めた。

……あの女が何者であるか確かめたい。

扉横で少し待っていると中から「あーッ！！」という叫び声とドタバタと騒がしい音が聞こえてきた。

何をやっているんだと思いつつ扉に目を遣ると小さな影が映り、次いで取っ手に手を掛ける気配がした。

……さあ、どうする？

「……………」

――女が横の扉から出てくることはなかった。

……あの女は先程俺が切った魔力を辿っていったのだ……残ったとても微弱な魔力の気配の道筋を。

……恐らく今頃は死学の階段を駆け上っているだろう。

目を見開いたまま立ち尽くす……やはり空間魔法が使えるようだ。……それも恐らく無意識に。



「……………」

あの女が着ていた制服のラインは赤……同年代だ。

明日から実習が始まる。また会う機会も多くあるだろう。

俺は久しぶりに自分の口角が上がるのを感じた……面白いものを見つけた。

…………… 退屈だった毎日が変わる。そんな気がした。

珍妙で不思議な死神（下）

本編18話目読解後推奨（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです  
、  
）  
、  
・  
・

安眠中横での取引 本編32話目読解後推奨（前書き）

ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の32話目読解後を推奨します。

講堂で爆睡中のヒイラギ横で遣り取りされていたキリュウ視点の裏話です。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

午後からある実習の説明が終わり、続々と生徒達が講堂を後にする中、俺は席を立たずそのままでいた。

チラリと隣に視線を遣ると朝から机に伏せたまま爆睡をしているヒイラギの姿が視界に入る。……間抜けさを惜しみなく出された、だがとても幸せそうな寝顔だ。

「……………いと……………うどん……………」

……………それは最早素麺ではないのか。

こいつは相変わらず夢の中で何かを食べているようだが……………決まって聞いたこともない細い麺ばかりらしい。

涎が垂れかけているそいつの頭を何となしに撫でる。

寝癖でビヨビヨとあちこちに跳ねた髪だが、触ると指通り良くサラリと零れ落ちた。どうやら寝癖は寝相というより髪質によるものらしい……………それはとても柔らかかった。

「……………おーおー、まさかお前のそんな姿を目にする日が来るとはなあ」

思わずそのまま指で髪を遊ばせていたら不意に声が掛けられた。その聞き覚えのある声に思わず眉根が寄る。

「……………何の用だ」

肩越しに振り返ると頭に描いた通りのいけ好かない笑みを浮かべている担任の姿があった。

俺が目を細めるとその男はニヤリと笑い、次いでヒイラギへと視線を落とす。

「……やっぱりそいつか。相手がひよつ子学生とはいえ、流石堕ちなかっただけはあるが」

先程まで俺に向けていた表情は何処へやら、彼女に向ける表情は苦いものであった。

……そういえば保健室の前で賭けがどうのこうのと言っていた気がする。恐らく彼女のおかげで負けたのだろう。良い気味だ。

「成績は最下位のくせに悪魔を蹴り飛ばすわ、空間魔法使うわ……一体何者だ？」

「……」

蹴り飛ばしたのか。……ああ、そついや保健室で蹴り上げられかけたし、教室でも手が出ていたな。いずれも未遂ではあったが、思わず隣で寝こけているパートナーを見る。無害そつな顔で暢気に寝息を立てている彼女は案外手や足が早いらしい。

「……その様子じゃお前も何も知らないようだな……知りたくはないか？」

「……何が言いたい」

意味深な目の前の男の言葉に眉根を寄せる。

男はニヤリと笑い一枚の小さな紙——通行手形を差し出した。きた。

「今、二枚ともお前が持つてるんだろ？」

貸せ。これをやる」

そう言いながら俺の目の前でそれをヒラヒラとさせる男。それを見て益々眉間の皺を深める。

恐らくアレの行き先はそこそこ危険な場所だ。ヒイラギを追い込んで正体を暴かせるという魂胆なのだろう。この男の考えそうな事だ。

「何者が知りたいんだろ？ だったらこれを使え。……危険になればお前が助ければ良い」

確かに危険に面しても彼女を助けられる自信はあった。癩だが正体を知りたいのも事実である。

「……」

チラリと見下ろせば当の本人は我関せずと眠りの世界を漂っている。……出来れば危険な目には合わせたくない。

……だが

「何者が分かったら報告しろよ」  
「……」

俺はそれを受け取った。

代わりに持っていた通行手形を渡す。そんな俺の様子に男はまたニヤリと笑い、空間魔法を使って何処かへ移動していった。煩い奴が消えた事で辺りを静寂が包む。

奴に調べられるくらいなら自分で調べた方が良い……勿論正体を知った所で報告するつもりは毛頭ないが。

柔らかで指通りの良い髪をもう一度梳く。彼女はまだ目覚める様子はない。

——誰が渡すか。

俺は手の中の紙切れを睨むように見た後、懐へと仕舞った。

安眠中横での取引 本編3.2話目読解後推奨(後書き)

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです (、・、)



ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の6話目読解後を推奨します。

ペア発表の日、講堂での裏話。イズミ先生視点の話です。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

黒学の生徒を講堂へ詰め込もうとするものの、中々スムーズにいかない。何度も経験したことが、相手は子供と言えども立派な悪魔……厄介だ。それにこれだけの数となると流石に骨が折れる。

予定の時間までに済みそうもない。遅れる、と受け持ちのクラスに連絡をして直ぐさま先程と同様に黒学の生徒達を講堂へ詰め込む作業を再開した。

「早く入りなさい」

「先生、死神にしては美人ですよ。生徒にモテませんか？」

「……世辞は結構です。そんな事はいいから早く中へ。時間が押しています」

「別に世辞なんかじゃないんですけどね」

魅惑の力を使いながらニヤニヤと笑う生徒達。私は仮にも教師。この程度の魅惑の力に負けるわけがない。

それでも腕試しか何かは分からないがこのように絡まれ、大幅に時間が掛かってしまうのだ。

毎度この作業の時は眉間に皺が寄りっぱなしになる。

「イズミ先生、お疲れ様です」

「……シマ先生」

「まあまあ、そんな顔しないで下さいよ。美人が台なしですよ？」

へらへらと笑いながらこちらに来る男は黒学の2-Aの担任、シマ。

彼を認めた瞬間、思わず苦虫を噛み潰したような表情になるのは仕方がない事だ。……私はこの男が苦手なのだから。

彼が黒学の教師に就任したのは去年の事である。それから何かにかけて私に付き纏ってくる。正直鬱陶しくて堪らない男だ。

「劳いの言葉を掛けて下さるくらいなら手伝って下さい」

「んー？それよりこれから二人で抜けませんか？」

「……シマ先生は目を開けたまま寝言が言えるのですね。目、覚まさせてあげましょうか？」

「おやおや、目覚めのキスなら大歓迎ですよ」

ニヤリと笑う目の前の男。自分の眉間の皺が深くなるのを自覚した。私は長いため息を吐き出してやり場のない怒りを少しでも逃がす。教師が生徒の前で乱闘を起こすわけにはいかない。……二人きりだったら間違いなく鎌で切り付けていただろうけれども。

「……顔を洗うのでしたらあちらに手洗い場があるので使って下さい。隣に掃除道具入れもあるので拭くものがなければどうぞご遠慮なく雑巾を使つて頂いて構いませんから」

「イズミは相変わらずつれませんねえ」

「シマ先生も相変わらず馴れ馴れしくて鬱陶しい野郎ですね。呼び捨てを許した覚えはありませんよ。不快極まりないですし殺意も湧くので是非ともやめてもらえませんか？」

「やだね」

「……」

私がイラつきを隠すことも無く半目になりながら伝えると彼はニヤリと笑いそう言い放った。いつもの事だ。……そしてそのいつもの事に毎度イライラする。誰かこの男を異界へ送り返してくれないものだろうか。送料は勿論私付けで構わない。チップも添えて喜ん

で払う。

協力は諦め空気として扱おうと決めた時、その空気が話しかけてきた。

「……それよりイズミ先生。賭け、しませんか？」  
「……」

勿論空気に言葉を返すつもりのない私は無視を決め込む。そもそも内容からして返す必要もない。

返事を返さない私をこれといって気にした様子でもないその空気はニヤリと笑って言い放った。

「賭<sup>の</sup>つてくれたら俺が黒学の生徒を詰め込みますよ」

ピクリと――僅かだが反応してしまった。……完全にやらかした。

あまりにもこの作業が大変な為、彼の誘惑の言葉についつい身体が勝手に反応してしまった。仕方がない事とはいえ、ここは何としても反応してはいけなかったのだ。

ほんの少し……ちょっと動きが止まった程度なのだが、目敏いこの男がそれを見逃すはずもなく、ニヤリとしていた笑みを深くする。……後ろに黒いものが見えた。これは関わってはいけなйдらう。

絶対に。

何とか打開策を見つけなければ。

「……賭りませんよ。大体賭けた後の条件なんて本当に呑んでくれるかどうかも分かりませんし」

「ちゃんとやりますよ」

「信用出来ません」

「……わかりました」

「え？」

やけにあっさり引いたなど不思議に思ったが彼の表情を見て自分の失言に気が付く。

しまった、と私が訂正の声を発する前に目の前の男が口を開いた。

「おい、お前ら さっさと入れ」

特別声を荒げた訳ではない。だが不思議と響くその低音はわいわいと騒いでいたにも関わらず黒学の生徒全員に伝わったらしい。

あれだけ苦戦していたというのに生徒達は素直にぞろぞろと講堂へ入って行った。

..... やられた。

【イズミ先生視点】 悪魔と賭け事（上）

本編6話目読解後推奨（後書き

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです（・・・）

ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の6話目読解後を推奨します。

悪魔と賭け事（上）の続きです。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

取引関係は悪魔の十八番だ。気を付けてはいたのだがどうやら私はやらかしてしまったらしい。

全員が入り終えたのを見送ってから痛む頭に手を遣って深い溜め息を吐きだし、ジロリと睨みつけるように隣を見た。

「……さて、賭けをしましょうか」

「……私、一言も賭るだなんて言っていないませんが」

「そうでしたっけ？でも俺は条件を呑みましたよ、ちゃんと」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる男。ちょっと抵抗してみたが無駄なようだ。何を言ってもあれよこれよと言い包められる気がしてならない。

私はまた深い溜め息を零し、口を開いた。

「……賭けの内容は何でしょうか」

「流石はイズミ先生。話が早い」

私が諦めた様子を認めた彼はニヤニヤとした顔のままそう言った。

「……どうしよう。物凄く切り刻みたい。

溢れる殺意を拳に力を入れて何とか止めた。

「賭けはそうですね……悪魔の魅惑に抵抗できる死学の2年生が一人でもいるかどうか……でどうです？」

「……」



……とても難しい賭けを出された。思わず眉間に皺が寄る。

教師としても私自身としても答えは『いる』だ。それは願いでもあるし、実際いるという確信でもある。しかし抵抗の度合いによっては抵抗と見なされないかもしれない。……例えば口では抵抗できていても態度、つまり顔が赤くなるなどしてしまえば抵抗と取られないかもしれないのだ。

どこまでが抵抗と取れるか。その線引きが重要となってくる。

「……抵抗とは何処までがそれと言えますか？」

「おや、用心深いですね」

「当たり前です」

何せ相手は悪魔だ。何処に穴を見つけて付け込んでくるか分かったものじゃない。

私がジロリと睨みつけると彼は少し考えた様子を見せ、「そうですねえ」と一言置いた後話し始めた。

「……では逆にイズミ先生は何処までが抵抗と見做みなしますか？」

——しまった。

その言葉を聞いて目を見開く。用心するつもりが墓穴を掘ってしまった。これでは容易に低い場所へ線引きを提示することが出来ない。

……やはり賭つてはいけなかった。

彼を見るとニヤニヤと意地悪く笑っていた。……これだから悪魔は嫌なのだ。

「まさか言葉だけで抵抗と見做すとは言いませんよね？俺からすれば顔が赤い時点で堕ちてますよ」

「……」

内心舌打ちをする。先手を打たれた。これではその条件を提示することなどできない。

彼は鬱陶しいくらい私の性格を把握している。ここで「それです」と言うのはプライドが許さないのだ。

何か、何か考えなければ……何処かに突破口が必ずあるはずだ。

「イズミ先生なら避ける、くらい言つてのけてくれそうですがね。生徒想いですし？あ、勿論赤面しない前提ですよ」

……何か、何かないだろうか。

「貴方の優秀な生徒さん達です。それくらいできないこともないでしょう？」

……何か……。

「まさか全員揃って諂うとむつちやいます？それはとんだ笑い種くみで」  
「それで」

目の前の男の言葉に自分の言葉を被せ、それ以上は言わせないとばかりに遮る。

私の中で何かが鈍い音を立てて切れた。身体から静かに、だが確実に殺気が溢れていることは自覚しているが止めようがない。

畏にかかっているのは重々承知だ。……それでもこれ以上こんな男なんか私の生徒を侮辱させるわけにはいかない。

「……へえ？それってどれです？」

「貴方が先程提示したものです。物足りませんか？……何なら平手打ちも付け加えましょうか」

私のその言葉に目の前の男が息を飲む心配がした。私がそこまで言うとは予想していなかったのだらう。ナメてもらっては困る。いく時はとことんいかせてもらおう。

「駄目ですかね？」

「……いえ、それで良いですよ。じゃあ俺は『いない』に賭けますね」

そう言っただけはまた元通りあの癪かんに障さわるニヤリとした表情を浮かべた。彼からすれば、期待以上の反応、といった所だらうか。

正直私も無謀な賭けだとは思う。だが確率はいくらゼロに近くともゼロそのものではない。

後はあの子達に託すだけだ。私の自慢の生徒達はきっとやってくれる。

「あ、俺が勝ったらデートして下さいね」

「……」

……やってくれる事を本気で祈った。

私の無言を肯定と取ったのか、彼は上機嫌で講堂に入って行った。その背中を射殺さんばかりに睨みつけた後、私も講堂へと足を踏み入れる。

「……………」

……本気である男を鎌の錆にしてくれようか。

確かに彼は生徒を講堂へ詰め込んだ……………言葉通りに。

講堂内で自由奔放に騒いでいる生徒達を据わった目で見遣る。

「すみません、少し外しますね」

「ッ！ちょっと待って下さい！」

生徒をぐるりと見回した彼はそう一言告げると私の制止の言葉を無視してサツサと講堂から出て行ってしまった。

「……………」

私はもう本日何回目になるかわからない深い溜息を吐き出した。

暫く経ってあの男は帰ってきたが、手伝はずもなく、結局彼等を着席させるのに時間を要し、予定時間に遅れてしまったのだった。

【イズミ先生視点】

悪魔と賭け事（中）

本編6話目読解後推奨（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです  
、  
）

【イズミ先生視点】 悪魔と賭け事（下）

本編6話目読解後推奨（前書き）

ネタバレがございますので本編小説『死神亜種』の6話目読解後を推奨します。

悪魔と賭け事（中）の続きです。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

いよいよ対面を果たした黒学と死学の生徒達。

……………結果、私は頭を抱える羽目となった。隣でニヤニヤ笑っているだろう男は視界に入れない。今あの顔を見たら脳を介す前に脊椎反射で殴ってしまいそうだ。思わず深い溜息を吐き出す。

入室前、死学の生徒達に念を押したのにも関わらず入口の時点で赤面する生徒が続出してしまった。…………それはもうあちら側にほぼ勝利が確定したものと言って良いくらいに。

私が見ていた中で確実に堕ちていないと言い切れる態度を取ったのは男女一人ずつの計、僅か二人だけだった。その数の少なさにもだが……………それよりもその二人の中にあの子がいることに驚きを隠せない。

ヒイラギ。

…………まさか万年学年最下位のあの子が無事だとは思わなかったのだ。全くの予想外だが例え一人でも…………ほんの僅かでも可能性が増える方が良い。現在彼女は机に伏せていてこちらから表情を読み取ることは出来ない。だがまだ堕ちてはいないように見える。

堕ちなかったもう一人の男子生徒に目を遣ると、赤面はしていないが黒学の生徒と仲良く談笑している姿が伺えた。…………こちらは平手打ちまでは難しいかもしれない。何せ話している相手は女だ。相手を殴るなど余程の事がなければ仕掛けないだろう。こちらからけしかける訳にもいかないし…………望みは薄い。

「俺の勝ちですね」

私が渋い表情でいると勝ち誇ったように男が話し掛けてきた。眉

間に皺を寄せジロリと首だけでそちらを向く。

「……まだ決まった訳ではありません」

「ああ、すみません。そうですね」

謝りつつもにやけた顔はそのまま……落ち着け、私。気が付けば手の平に爪が食い込むほど拳を握り締めていた。これを本能のままに解き放つ事が出来れば……いや、駄目だ。

生徒の面前生徒の面前、と呪文の様に何度も心中で繰り返して自分に言い聞かせ、ゆっくりと細く息を吐き出ながら拳を緩める。

一発でも殴れば多少なりとスッキリするだろうにそれが出来ない。先程から苛々が 募りに募って、これ以上我慢できるか自信がなくなってきた。……誰でも良いから私の代わりにこの男を渾身の力で殴ってはくれないだろうか。勿論その事は見逃す。逆に私は褒めちぎるだろう。

そんな私を知ってか知らずか……いや、確実に前者なのだが、男は生徒を観察しつつ呑気に話を続ける。

「2人、ですかね。 あ、ほらイズミ先生、男子生徒の方はしな垂れかかれても無抵抗ですよ」

彼の視線の先に私もそれを合わせる。確かに抵抗してないように見えなくもないが、ここで認めてしまうとあとはヒイラギだけになっってしまう。……それは何とか避けたい。

「……そうですね。でもまだ顔は赤くなっています。好きにさせてるだけだと思いますが」

「……クク……まあ、良いでしょう」

笑いを抑えながらそう言う男を横目で睨みつけた。おまけしてや



ると言外に言っているのだろうが事実だ。事実だ。  
それから落ちないことを願いつつ不本意ながら隣の男と2人で  
暫く生徒達の監視を勤めた。

「　　おや、死学の女子生徒が何やら話しているようですね」

一行に進展のない様子に本来の仕事である監視を行っている隣  
からその声が聞こえた。

私も彼の視線を追って見てみると確かにヒイラギが黒学の男子生  
徒と喋っている。両手で口元を覆っていてその表情はあまり伺えな  
いが、まだ堕ちていないようだ……いや、寧ろ　　避けている？

「黒学の男子生徒がハンカチ出してますし……彼女鼻血でも垂らし  
てるんじゃないですか？」

「　　違います」

彼を睨みつけ、視線を彼女へ戻した時、信じられない光景が目に  
映り、私は思わず言葉を飲み込んだ。

ガタンツという大きな音が講堂内に響く。

「な……ッ！！」

隣から驚きの声が上がったのがどこか遠くで聞こえた。私は目を  
見開いたまま固まる。

……今何が起きた？

私は一瞬自分の目を疑ったが隣の男の反応を見る限り、今し方見  
た光景は現実のものらしい。

椅子から落ちて床に倒れている黒学の生徒。そして彼を無表情に

見下ろしているのは――ヒイラギ。

私の目が確かなら間違いなく彼女は黒学の生徒の顔面に踵落としのような回し蹴りを喰らわせた。喰らった相手の鼻からは止め処なくダラダラと血が流れている。平手打ちなど比較にならない……それは誰から見ても明らか拒絶。

床に倒れている生徒に汚いゴミを見るような視線を向けて彼女が口を開く。……唇の動きを読むと彼女は確かにこう言った。

『テメエで使えよ、鼻血垂れ』

無意識に口角が上がるのを感じた……私は今物凄く意地の悪い顔になっているだろう。隣を見れば珍しく眉間に皺を刻んで彼女を凝視する男が立っていた。

ヒイラギ、よくぞやってくれた。

「私の勝ちですね」

私がそう言うのと返事の代わりに舌打ちが返ってきた。今まで言葉巧みにかかわれ続けていたが……やっとこの男に意趣返しができる。とても清々しい気分だ。

これだけでも賭けに勝った価値はあるが――

「では、今後私の事を呼び捨てで呼ばないで下さいね」

忘れず勝ち分を頂くとする。

今後一切近づくな、関わるな、と言いたい所だが同じ学年の教師同士、それは不可能に近い。だから私は可能であるその条件を出した。これで少しは苛々が解消するだろう事を願う。

私がニコリとそう言うときまた返事の代わりに舌打ちが聞こえた。



【イズミ先生視点】 悪魔と賭け事（下） 本編6話目読解後推奨（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです（ ． ． ． ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4429s/>

---

裏亜種

2011年7月24日18時42分発行